

戦後の谷崎潤一郎——新資料に寄せて

細 江 光

この度、私は、昭和三十四年二月二十八日発行の日

劇ミュージック・ホール『白日夢』パンフレット(表

紙題名は“GRAND NU FOLLIES LOVE VICE

VERSA HATRED”)をたまたま入手し、谷崎潤一

郎の談話「観客になって楽しみたい」が掲載されてい

るのを発見した。よって、以下に若干の解説を加えた

上で、同パンフレットに載った演出者・丸尾長頭の一

文「夢中で迎える七周年」と共に、翻刻・紹介したい。

また、この機会に、従来あまり研究されて来なかつ

た谷崎潤一郎とストリップとの関係について、私が調

べ得たデータを年表形式にまとめ、併せて戦後の谷崎

の変貌について、若干の私見を述べて見たい。

一、新資料紹介

日劇ミュージック・ホールの『白日夢』は、谷崎潤

一郎の『白日夢』と『白狐の湯』をもとにして作られ

たヌードショウで、昭和三十四年二月二十六日から五

月五日まで、日劇ミュージック・ホールの七周年記念

豪華公演と銘打って、上演されたものである。

パンフレットによれば、プログラムは、第一部「白

日夢」が、プロローグ・踊る字幕・白日夢(A)(B)

(C)・飛び出す白狐・白狐の湯(A)(B)の全8景。

谷崎が最頁にしていた春川ますみが、『白日夢』の令

嬢役などで出演。『白日夢』のドクターは益田隆、『白狐の湯』のローザは、オーストラリア人のピーチェス・ブラウンが演じた(写真1)。

第二部は「残酷物語」と題され、むち・血の酒宴・恋の歌・めくらとアベック・ドラムとドラム・恍惚・春風のいたづら・恋と私・トランベツトは浮気もの・もも切り魔のクシャミ・楽しいステップ・血に飢えた男・いとせめて・花見ごろも・いも虫ごろごろ・グラインドフィナーレの全16景。「恍惚」に谷崎が推薦した谷内リエ(写真2)、「いも虫ごろごろ」と「グラインド・フィナーレ」に春川ますみが出演した。

谷崎の「観客になって楽しみたい」によれば、谷崎は『白日夢』と『白狐の湯』を原作として提供した外には、『部分的に案を出し』ただけということである。その《案》の具体的な内容は、この一文からは、谷内リエを《思う存分踊らして欲しいと注文を出し》たこと以外、分らないが、丸尾長頭の「夢中で迎える七周年」によれば、『ヌードをフロントの穴へ突落すこと』や『グランギニョールのようなものを』出すこと

など、『色々と』《相談》に応じたようである。丸尾の「楽屋のおもかげ」(『中央公論』S 40/10)によれば、谷崎は「この次には脚本を書いて演出するよ」と言っていたとのことであり、谷崎の「観客になって楽しみたい」でも、『乗り出して、演出まで引受けてみたい



写真1 グラインド・フィナーレ。中央ピーチェス・ブラウン。その右、益田隆。

気持もある」と語っているので、谷崎がかなり積極的だったことは確かなのである。

丸尾長頭の著書『回想小林一三』や『日劇ミュージック・ホールのすべて』によれば、『白狐の湯』は丸尾が翻案して脚本を書いたが、『白日夢』の部分は谷崎自身が書いたとのことであるが、今、これを確認することは出来ない。いずれにしても、日劇ミュージック・ホール、およびヌード・ショウというもののへの谷崎の関心の強さを、軽視すべきではあるまい。

なお、谷崎が推薦したという谷内リエ（梨枝子）に



写真2 谷内リエ

については、不明の点が多いが、橋本与志夫・石崎勝久著『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』（東宝出版・1982年刊）によれば、昭和二十八年一月二月の「一日だけの恋人」に出演し、クロちゃんの愛称で呼ばれた。その後、昭和三十三年十一月の「夜ごと日ごとの唇」に六年ぶりに出演して、強烈な個性を見せた、とあるが、日本では、余り人気は出なかったようである。また、丸尾長頭編『日劇ミュージック・ホールのすべて』に谷内リエとして出ている女性と同一人物だとすれば、「日劇MHの初期に一度登場したことのある非常に特異なエキゾチックな踊子で、毎日日光浴をしてわざと肌を黒く焼いていると言われていた。ショウ・ダンサーとしては第一人者で、ラスベガスに出演して以来、名声高く、帰朝後また日劇MHの舞台に立った。日本人より外人受けのする踊子」とある。日本でよりアメリカで評価されたこの踊子に、谷崎が早速目を付けたことは、谷崎の優れた鑑賞眼を示すエピソードと言ってよいのではないだろうか。

なお、実際に谷内リエの踊りを見た渡辺清治氏によ

れば、彼女の踊りは身のこなしが日本人離れしていて、歯切れが良く、そして粘りのある、見ていて気持ちのいいものだったそうである。

* * *

観客になつて

楽しみたい

谷崎潤一郎（談）

日劇ミュージック・ホールは好きで、度々見ているし、小説に書いたこともある。

乗り出して、演出まで引受けてみたい気持ちもあるのだが、今回は初めてだから「白日夢」と「白狐の湯」の二つの作品を提供して、あとは、部分的に案を出して、丸尾君に構成も演出も任せることに

した。

しかし、出来上った脚本を見ると、残酷なところがあるので、あれは困る、演出で柔かくしておくようにと、頼んでおいたが、どうなることかと心配だ。

谷内リエはショウの踊子としては異色のある存在だと思う。一番ミュージック・ホールのな踊子だから、是非、谷内に思う存分踊らして欲しいと注文を出しておいたが、それが実現したので楽しんだ。

またヒイキの春川ますみが、私の作品だからというので「白日夢」に出演してくれるのは、まことに嬉しい。

これを最後に映画界に入るそうだから、そのはなむけになればありがたい。

益田隆が「白日夢」のドクターに扮するのも、変っていて面白いと期待している。

とにかく私の作品や案が、どんな風にミュージック・ホールの舞台で演出されるか、ちょっと見当が付かないが、今までと違った多少異色あるショウになりそうだから、わたしはむしろ、観客の側に廻って楽しみたいと思っている。

少し健康をそこねているので、舞台稽古に立ち合えないのが、かえすがえすも残念だ。

* * *

夢中で迎える七周年【演出家の手記】

丸 尾 長 顕

とうとう七年という歳月が、流れてしまった。全く、無我夢中の七年でした。

でも、やっと日劇MHの基礎は確立したように思うのです。近着のアメリカの雑誌“ESCAPADE”を見

たら、色々と日劇MHの記事や写真を掲載して

(日本のベスト・ショウは日劇MHで見られる。

アメリカ人や旅行者や日本の上流階級が主な観客で、いつも満員である。)

と、紹介してくれました。

決して自惚れるワケではありませんが、新しい演劇のジャンルとしてのMHが、よくここまで成長したものだ、沁々嬉しく思います。これもみな観客の皆様のお蔭であると感謝しています。

満七周年を迎えて、痛切に感じることは、サル真似でない日本独自のヌード・ショウを立派に開花せねばならぬということです。

谷崎潤一郎先生に御案を頂いて、その第一の花を開かせたのがこの「白日夢」です。

先生は日劇MHをヒイキにして下すって、殆んど毎公演御覧になりますが、松子夫人からも

「ミュージック・ホールを見た後、二三日は大変機嫌がいいんですよ」

というお手紙をもらったほどです。

そこで、関西以来三十年以上も親しくして頂いて、御厚情に甘えて、御無理を願ったところ、言下に、御快諾を得たので、飛び上るほど嬉しく思いました。「先生の御覧になりたいショウを上演しようではありませんか」

というのが、私の提案でした。

第1部は先生の作品「白日夢」と「白狐の湯」を中心に構成しました。

武智鉄二先生も「白日夢」をテレビで放送する企画をもっていられたので、大いにそのお知恵を拝借しました。「白狐の湯」は度々上演された傑作ですが、思い切ってMH向きにアレンジさせて頂きました。先生は苦笑いしていられましたが、白狐に扮する白人の水に濡れた肌の美しさを充分に出してみたいと思います。日本舞踊も出来るマンボの名手、豪州生れのピーチェス・ブラウン嬢を得たことは、この上もない喜びです。第2部の「残酷物語」は、色々先生と相談して構成しましたが、さて、脚本が出来上ってみると

「こんな血が滴るようなショウは残酷すぎて、怖い

よ」

と、叱られました。

「ヌードをフロントの穴へ突落すことは出来ないかね？」

という先生の案から「血の酒宴」が生まれました。

「谷内リエ君は今まで見た一番面白い踊子だから、あれに存分に踊らせてみたら」

との御提案から「恍惚」が、グランギニョールのようなものをということから「血に飢えた男」が、そして、「細雪」にある

いとせめて花見衣に花びらを

秘めておかまし春の名残りに

という歌を、私は大変好きなので、その和歌の心をショウ化して見たのが「花見ごろも」です。こんなわけで第2部は谷崎先生に捧げるショウといった形になりました。

谷崎先生が御ヒイキの春川ますみが、一年半ぶりに先生の作品ということで出演することになりました。彼女は、この舞台を最後に映画界に専念するそうです。

* * *

二、谷崎潤一郎とストリップ関連略年表

◆大正三年◆(1914 甲寅)(数え年二十九歳)

12・4・17 『金色の死—或る富豪の話—』(東京

朝日新聞)

※ドイツでは、1909年に画家フランツ・トーマンの発案で「金のヴィナス」という名で、女が全身に金粉を塗って舞台に出た。彫刻の名作を手本にした活人画が流行したのもその頃である(秦豊吉『宝塚と日劇』)。「金色の死」の構想に影響する所があったか?

◆大正十一年◆(1922 壬戌)(数え年三十七歳)

9・12 ゲーテ座で映画「アナトール」上映(升本

匡彦著『横浜、ゲーテ座』)

※『アエ・マリア』によれば、映画「アナトール」のキャバレーの場面に、大理石の彫像と見まごう裸体女性のシヨウが出る。『肉塊』(七)・『痴人の愛』(二

十六)などの彫像シーンに影響したか?

※キャバレーのシヨウ「生きた大理石像」は、秦豊吉著『日劇シヨウより帝劇ミュージカルスまで』P149によれば、秦豊吉が見た一九二〇年頃、既にロンドンのヴァライエティー劇場では珍しい出し物ではなくなっていた。

※ゲーテ座では、観客が外国人であるという理由から、映画に対する検閲が、日本の他の映画館に比して寛大だったと言う(升本匡彦著『横浜、ゲーテ座』)。

★戦前は、西洋の裸体文化に直接ふれる機会が得られなかったので、影響は主として文献を通じた間接的なものに留まったと推定される。

◆昭和二十二年◆(1947 丁亥)(数え年六十二歳)

1・1・20 東京新宿の帝都座五階劇場で上演された「ヴィキナス誕生」が日本に於けるストリップの嚆矢。ただし、大きな額縁の中で半裸のモデルがポーズを作り、わずかの時間、幕を開くだけだった。翌年9月ま

で帝都座では同種の作品が次々に上演された(秦豊吉著『日劇ショウより帝劇ミュージカルスまで』)。

5・11 (雨) 京都市長和辻春樹の紹介で和辻夫人が京大の辻博士を谷崎宅に連れてくる。『細雪』下巻の完結が近かったが、執筆を禁じられる、酒も禁じられる(『高血圧症の思ひ出』『京洛その折々』)。

※『細雪』瑣談』によれば、『下巻の初めを書いてゐたころ、血圧が非常に高くなって、医者に執筆を停められ(中略)半年ほどブラ／＼してゐた』。↓高血圧症の始まり。

★夏の初め、高島屋社長飯田直次郎から阪大内科布施信良博士の自家血注療法を教えられる。8月の或る日阪大病院布施内科へ行く。血圧150／200。治療を受けて数日後、2回目に行った時には、120／180と顕著な効果が出たので、昭和二十四年五月末、下鴨に転居した頃まで、3年くらい治療を続けた。一時中断していた『細雪』下巻の執筆も再開できた(『高血圧症の思ひ出』)。

8・11 14 帝都座五階劇場で空気座が、田村泰次

郎原作『肉体の門』を上演。半裸のリンチ・シーンで人気を呼ぶ(同年9・4／10・2、11・1／25 同劇場で再演)(秦豊吉著『日劇ショウより帝劇ミュージカルスまで』)。

◆昭和二十三年◆(1948 戊子)(数え年六十三歳)

3・3 浅草の常盤座で、劇団「新風俗」が街娼の実態を写實的に演出した「闇の夜の手記・悲しき抵抗」などで旗揚げ公演。ヘレン滝らが出演。踊りながら全裸に近いストリップを見せたのは、これが本邦初で、大評判になった。永井荷風が楽屋を訪ねるようになって、ジャーナリズムの話題となったのもこの頃(『松竹七十年史』)。

※「映画についての雑談」(昭和23年5月「オール読物」谷崎潤一郎・高峰秀子)で、谷崎は「今度東京へ行った時、帝都座ショウや常盤座を初めて見た。『肉体の門』は見たかったけれど見られなかった」と発言。※座談会「谷崎潤一郎をかこむ座談会 観る話・食べ

る話」(昭和23年9月「読物時事」)で、谷崎は『肉体の門』の芝居は、空気座ではなくインチキなのを京都で見たが面白かった。帝都座は、この間益田隆のを見た。ハダカの中ではあれが一番いい」と発言。S23・2・1〜3・2 帝都座五階劇場公演「踊る益田隆」のことか?

5・27 午後、谷崎潤一郎・笹沼宗一郎・千代子で、常盤座・ロック座を観に行く(笹沼千代子日記)。

※『松竹七十年史』によれば、この日の常盤座は、川端康成原作『浅草紅団』とデカメロンショウ「覗かれた女線」。

※常盤座はヘレン滝、ロック座はメリー松原の時代(橋本与志夫『ヌードさん』)

※ヘレン滝・メリー松原ともに、笹沼千代子はとても美人だと思ったが、潤一郎は好まなかった。常盤座には、既に行ったことがある風だった。ヘレン滝は、花道から観客の顔や頭を撫でていた。楽屋へ行ったのは日劇の時で、この時は行かなかった。千代子がストリップに同行した際は、これ以後、喜美子と一緒にだっ

たことがあるだけで、松子・笹沼喜代子・宗一郎と行ったことはないと記憶している(H8/9/16 笹沼千代子私信)。

※笹沼千代子は、ストリップはこの時が初めてで、不潔という感じがしてショックを受けた。ストリップを見に行くことは、実家(犬丸家)には話してなかった。客席は男ばかりで、品が良いとはとても言えなかった(H9/5/25 笹沼千代子私信)。

10・16 嶋中雄作宛書簡、「毎日新聞」連載物は『武州公秘話』続編を止めて、他のもの(『少将滋幹の母』)を既に執筆開始。

※この頃か? 潺湲亭に起き伏しする頃、「たのめつる人の手枕かひなくて明けぬる朝の静心なき」と詠んだ。或いは他の女性の場合ならと松子が本心で浮気を勧めてみたが、淡々と聞き流していた。谷崎の方が松子に「浮気をして構わないよ」と涙を流しながら、思い決したように言ったこともあった。この時、『少将滋幹の母』の原稿が机の上に載せられていた(松子「薄紅梅」『倚松庵の夢』)。↓老人性インポテンツの始

まり。

◆昭和二十四年◆(1949 己丑)(数え年六十四歳)

4・29 京都市左京区下鴨泉川町五番地に転居、「後の潺湲亭」と呼ばれる。以後、昭和三十一年十二月までここに住む。

※潤一郎は下鴨の潺湲亭時代から、よくストリップを見に行くようになった。清治も一緒に行くことがあった。東京でもお供をした。日劇ミュージック・ホールでは、奈良あけみが出て居た(S28/1~32/11)ことが記憶に残っている(1998/8/23渡辺清治氏直話)。

8・20 日劇小劇場(後の日劇ミュージック・ホール)が本格的なストリップショウ「女の楽園」を上演。以後、昭和二十七年一月まで、ストリップショウを継続する(橋本与志夫『ヌードさん』)。

※谷崎は、『過酸化マンガン水の夢』で、日劇ミュージック・ホールを「日劇小劇場ミュージックホール」

と呼んでいる。恐らく日劇小劇場時代にも、見に行ったのであろう。

◆昭和二十五年◆(1950 庚寅)(数え年六十五歳)

4 「主婦の友」に「文豪谷崎潤一郎先生と石坂洋次郎先生の春宵対談」掲載。自らのインポテンツを仄めかす発言あり。

◆昭和二十六年◆(1951 辛卯)(数え年六十六歳)

2・6~3・27 第1回帝劇コミックオペラとして菊田一夫作「モルガンお雪」上演。主演・古川緑波、越路吹雪。大量のヌードダンサーが出演(橋本与志夫『ヌードさん』)。

3・3 古川緑波から谷崎潤一郎宛書簡。『モルガンお雪』を一度見て欲しい。裸も出る。松本四郎も一緒。

※「北原三枝も出ていたが、気が付かなかった」と

『老いのくりこと』にあることから、谷崎が見たことが確認できる。

4 「芸術新潮」に徳川夢声との対談「谷崎潤一郎素描―芸道漫歩対談6―」掲載。自らのインボテンツを明言している。

5・2 渡辺清治と千萬子が結婚する。↓千萬子との交流の始まり

7・15 笹沼喜代子夫人と江藤喜美子の帯に谷崎が和歌を揮毫する際、激しい眩暈に襲われる（『高血圧症の思ひ出』）。

8 中旬？ 上山草人が映画『源氏物語』出演のために来京した時、夜、二人で京極を散歩し、ストリップ・ショウを見て帰ったことがあった（『樟蔭文学』S 29/6 和田利政「上山草人の思ひ出」）。

※谷崎潤一郎は京都でも九条などのストリップによく行っていた（1998/8/23 渡辺清治氏直話）。

★年末か二十七年の初めに、伊東で小児科を開業していた古くからの友人泉田知武に血圧を計って貰う。極めて高かったが、知らされず（『高血圧症の思ひ出』）。

◆昭和二十七年◆（1952 壬辰）（数え年六十七歳）

1・18 大倉喜七郎の招待により、松子が重箱へ行く。志賀直哉・広津和郎夫妻・福田蘭童夫妻など一座（志賀直哉日記）。

※潤一郎は起きると眩暈がするので欠席ということで、蘭童が松子を代わりに誘い出した。松子は、潤一郎が高血圧で、『源氏物語』の原稿が続けにくくなっていること、好きなコキールやビフテキが食べられないこと等を語った（『小説新潮』1955/7 福田蘭童「谷崎さんと生魅」）。

1・31 公職追放が解けた小林一三が東宝社長に返り咲き、ストリップ追放を宣言して日劇小劇場を閉鎖（橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』）。

※この時、丸尾長頭が日劇ミュージック・ホールの五人の運営委員の一人に就任。丸尾長頭は大阪時代から谷崎潤一郎に弟子入りの約束をしていたので、「日劇ミュージック・ホールを引受けることになったので、暫く小説は書けません」と断りに来た。すると谷崎潤

一郎は、「それはその方がいいだろう。俺は俺を楽しませてくれるミュージックホールの責任者になってくれる方が有り難い」と言った(丸尾長顕『回想小林一三』)。

※丸尾長顕の「夢中で迎える七周年」(S 34・2・28 発行日劇ミュージック・ホール・『白日夢』パンフレット)によれば、谷崎は日劇MHを殆んど毎公演見る。松子夫人からも「ミュージック・ホールを見た後、二三日は大変機嫌がいいんですよ」という手紙をもらった。

3・16〜31 日劇小劇場を日劇ミュージック・ホールと改称し、「東京のイヴ」でこけら落とし公演。高級な音楽ショウの上演を目標とし、舞台装置を岡本太郎に依頼し、出演者には越路吹雪ら一流所を集めたが、全くの不入りのため、公演は31日までで打ち切られた(橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

※「東京のイヴ」の時には、谷崎も招待された(1999/9/22 渡辺清治氏私信)。

4・4 松子・重子と新橋演舞場の春のをどり昼の

部を見に行った際、新橋駅到着直前に異常が生じる。12日まで、福田家の2階座敷で仰臥(『高血圧症の思ひ出』)。

※右半身が多少不自由になり、二十九年秋まで寝たり起きたりの生活が続く(『台所太平記』)。

4・25〜5・25 日劇ミュージック・ホールで「ラブ・ハーバー」。丸尾長顕の意見で、ヌードを復活させた。以後、次第にヌードが主体になる(丸尾長顕編『日劇ミュージック・ホールのすべて』)。

※以後、日劇ミュージック・ホールでは、猥褻感の強いストリップ・ティーズに対して、最初から半裸体でするヌード・ショウを目指すようになった(石崎勝久『裸の女神たち』)。

※谷崎が日劇ミュージック・ホールを好んだのも、その為であろう。渡辺清治氏(1998/8/23 直話)によれば、「潤一郎は局部丸出しはグロテスクだと言いつ、日劇ミュージック・ホールのような綺麗なヌードを好んだ」と言う。

6・7 十一世茂山千五郎狂言小謡・小舞公演『細

雪』

※茂山千之丞『狂言役者——ひねくれ半代記』によれば、千五郎の還暦祝いの会のために谷崎に頼み、千之丞の節付け、千五郎の型付で発表。当日谷崎は東京にいた。プログラムの誤植について叱られ、下鴨に御詫びに行く。その一ヵ月ほど後、新京極のストリップ劇場で大きなマスクをした谷崎と会う。

※雑誌「京都」37号(S 28/11)のストリップバーの座談会「京都とストリップ」に、京極小劇場(当時は京都で唯一のストリップ劇場。元は大映にもあった)に「谷崎潤一郎が一度見に来たようだ」とある。

6・28 前日、灸を据えて貰った所、朝から体調に異変、欄間に掛けてあった伊藤博文の額の文字がはっきり読めなくなっていた。終日安静。この後、耳下腺炎が二三日・三叉神経痛が一週間以上・記憶の空白が約十日間など、障害が次々に起こり、沼津の飯塚直彦博士の診察を受ける。笹沼夫人・登代子・喜代子の見舞いを受ける。病室で暫く話したが、会話に辻褃を合わせることは出来たが、相手と自分の関係は解っても、

相手の名前は思い出せなかった。8(7?)月21日まで病床にある。その後も二三年間激しい眩暈が続き、昭和34年になっても完治していない(『高血圧症の思ひ出』)。

7 吉井勇が、初めて浅草の公園劇場と美人座を見、美人座支配人・森福二郎と話す。その時、吉井は「谷崎君もストリップ見るために髪を分けるって言ったよ。顔を知られたくないためらしいな」と語った(森福二郎『はだかの楽屋』)。

8 初め『源氏物語』新訳の第一稿は「行幸」、タイプライター原稿は「常夏」「篝火」あたりまで進んでいた。死を考え、涙が止らないこともあった(『高血圧症の思ひ出』)。

★夏頃、松子の従妹(布谷?)の紹介でヨシ(『台所太平記』の百合)が勤め始める。

※ヨシさんが来て暫くして、仲田の前の雪後庵から海の方へ二三軒降りた所に借りていた仕事場で、谷崎は、毎日ヨシさんの足の拓本を取った。谷崎はヨシさんの口封じに指輪かネックレスを買い与えようとしたが、

ヨシさんは断った。拓本作りに疲れると、ヨシさんに背中を踏んで貰って、「痛い、痛い、痛いけどいい気持ちだ」と言ったり言う（伊吹和子『われよりほかに』。↓『瘋癲老人日記』のモデルの一つ）。

9・2 松子・重子と上京、神経科のQ博士の診察を受ける。二週間仕事を休み、薬を飲むことになったが、眩暈は一層悪化した（『高血圧症の思ひ出』）。

10・23（11・6 嶋中鵬二宛書簡470では24日）気分転換のために、冬に向う京都に敢えて戻る。松子・重子・恵美子の他に、森田紀三郎も京都まで付き添ってくれた。迎えに出ていた運送店の主人に背負われないと駅のブリッジを渡れないなど、眩暈がひどかった（『高血圧症の思ひ出』）。

10 末にA県のN氏を再び呼んで、12月末まで灸を据えて貰うが、眩暈は悪化する一方だった（『高血圧症の思ひ出』）。

11・17 猛烈な眩暈に襲われる（『高血圧症の思ひ出』）。

◆昭和二十八年◆（1953 癸巳）（数え年六十八歳）

3、4月頃から健康状態好転し、5月には河原町あたりまで散歩に出たり、松竹座や朝日会館を覗いてみたり出来るようになっていた。（『台所太平記』『高血圧症の思ひ出』）

★夏頃になって、血圧が落ち着く。ただし、眩暈は続く（『高血圧症の思ひ出』）。

7・15〜8・30 日劇ミュージック・ホール「人魚の恋文」第六景の雪だるま役で、春川ますみ（1935）が初舞台。

※ただし、日劇小劇場時代にも、メリー・ローズの名で、バーレスクに出演したことがある（橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』）。

※新聞で好評を得た。自慢は劇場一を誇る92センチのバスト。シモーヌ・シモンに似ているので、劇場内では通称シモンちゃん。身長五尺二寸八分、十五貫（『週刊新潮』1956/10/8）。

※ダルマちゃんがニックネームになった（丸尾長顕編

『日劇ミュージック・ホールのすべて』

※以後、春川ますみは、昭和三十二年九月まで、OSミュージックホール出演などのために四回休んだ以外は、日劇ミュージック・ホールのすべての出し物（まる四年間の二十一公演）に出演した。

※谷崎は春川ますみの大ファンで、千萬子が何度もミュージックホールにお供した（渡辺千萬子「見せてあげたい最近のファッション」『谷崎潤一郎文庫』月報4）。

◆昭和二十九年◆（1954 甲午）（数え年六十九歳）

★『過酸化マンガンの夢』では、この年あたりから、家人（松子）と珠子（重子）から日劇ミュージック・ホールに連れて行って欲しいと言われていたことになっている。

7・9 大阪梅田にOSミュージック・ホール開場
こけら落としに春川ますみも出演（橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』）。

※谷崎潤一郎はOSミュージック・ホールにもよく

行った（1998/8/23 渡辺清治氏直話）。

※『過酸化マンガンの夢』に《同じミュウジックホールでも大阪のOSKの方が居心地よし》とあるのは、OSM（OSミュージックホール）の誤りであろう。

◆昭和三十年◆（1955 乙未）（数え年七十歳）

2・15 「内外タイムス」四面に日劇ミュージック・ホール「恋には七つの鍵がある」についての記事。
三島由紀夫はギリシャを舞台に「恋を開く酒の鍵」、村松梢風は中国、東郷青児はパリ、小牧正英はロシア、北条誠はスペイン、トニー谷は国定忠治、三林亮太郎は仮想国。

3・4 「内外タイムス」四面に日劇ミュージック・ホール「恋には七つの鍵がある」広告。《開場三周年記念特別公演 三島由紀夫・村松梢風・東郷青児・小牧正英・北条誠・トニー谷・三林亮太郎共同脚本 丸尾長頭構成・演出》出演者ジプシー・ローズ・伊吹まりの写真入り。

※3月4日から4月24日まで(橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

3・26 「内外タイムス」四面に、KR(ラジオ東京テレビ)が日劇ミュージック・ホールの「恋には七つの鍵がある」を4月8日から毎週金曜12時10分から20分間、8回にわたってテレビ放送すると出る。

★春、『過酸化マンガンの夢』では、家人(松子)と珠子(重子)が河原町の京劇で映画「裸の女神(Ahi Les Belles Bacchantes)」を見たことになっている。1999/9/22渡辺清治氏私信によれば、家族揃って見に行った記憶があるとのこと。

※「内外タイムス」S30/4/2四面「裸の女神」広告に《今パリで評判の艶笑人気バレスクがそっくり御覧になれます! 長篇総天然色 裸の女神 パリ一流芸能人総出演 監督ジャン・ルービニャック》とある。

6・4 大阪三越劇場で関西オペラ公演。武智鉄二演出『白狐の湯』。谷崎の作品の初めてのオペラ化であった。狐の入浴シーンにヌードが出て話題になった

(橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』)。

※「朝日新聞」6・12(3)面「人寸描」欄によれば、谷崎は京都で稽古に立合った。

※権藤芳一「武智鉄二資料集成(5)」(『上方芸能』)によれば、六月十一〜十二日。木下順二『赤い陣羽織』と二本立て。第一回オペラ・プティ公演。入浴シーンはストリップバーのスタンド・インで紗幕ごしに見せた。

7 『過酸化マンガンの夢』では、美津子(千萬子)が一人で「恋には七つの鍵がある」を観に行き、ジブシー・ローズが良かったと言うことになっているが、「恋には七つの鍵がある」は3月4日から4月24日まで。確認はできないが、実際には谷崎潤一郎が見たか?

※「国文学」1998/5インタビュー「渡辺千萬子氏に聞く」によれば、千萬子がミュージックホールへ行ったというのはフィクション。ミュージックホールへは必ず谷崎潤一郎と一緒に。谷崎は丸尾長頭と親しく、終わると楽屋へ行って、裸の美女に取り囲まれて、すごく嬉しそうだった。

8・8 『過酸化マンガンの夢』によれば、谷崎潤一郎は、家人（松子）・珠子（重子）を連れて、日劇ミュージック・ホールで、丸尾長顕脚本の「誘惑の愉しみ」全二十景を見る。春川ますみが気に入る。猫のような感じのする顔・シモン・シモン式の顔でない、と愛着を感じない。

※「誘惑の愉しみ」は7月23日から8月28日まで（橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』）。

11・3・12・26 日劇ミュージック・ホールで「桃色の手袋」。小浜奈々子が初出演。以後、昭和四十七年二月に引退するまで、トップ・スターとして活躍。※谷崎潤一郎は小浜奈々子も好みだったようで、昭和三十七年に楽屋で一緒に撮った写真がある。

※小浜奈々子は『過酸化マンガンの夢』と『柳湯の事件』を武智鉄二が映画化した『紅閨夢』（S 39・8・12 封切り）にも特別出演した。

11・23 夜9時15分からNHKテレビで佐々木茂素との対談「谷崎潤一郎夜話」放映。「ストリップはよく見る」と語る。

◆昭和三十一年◆（1956 丙申）（数え年七十一歳）

1・5・12 「中央公論」に『鍵』を連載。

※郁子が木村を相手にアクロバットのような真似をした、とあるのは、ストリップパーが行うアクロバティック・ダンスを念頭に置いたものであろう。

正月以来、高血圧症が起る（嶋中鵬二氏に送る手紙『鴨東綺譚著者の言葉』）

9 OS ミュージックホールで武智鉄二のヌード能「羽衣」「海人」公演。谷崎が見て、非常に感心した。そこで武智鉄二が谷崎作品のヌード化を申し入れ、快諾を得た。『鍵』『猫と庄造と二人のをんな』『白狐の湯』『刺青』などをオムニバス形式でヌード化し、装置は小磯良平、音楽は朝比奈隆、演技指導は森繁久弥、バレエは近藤玲子に依頼する予定だったが、種々の事情から実現しなかった。谷崎は、OS ミュージックホール専属のコメディアン立原博らについて、「大阪にはいいコメディアンがいるね」と感心していたと言（改田博三『上方ヌード盛衰記』）。

11・16・12・26 日劇ミュージック・ホールで「三つの饗宴」上演。第一部は、武智鉄二「構成・演出のヌード能」「能楽コント」で、「羽衣」「葵の上」に基づく。谷崎が見たかどうかは不明。

◆昭和三十二年◆(1957 丁酉) (数え年七十二歳)

2・5 深夜1時から日劇ミュージック・ホールで開かれた深沢七郎の『檀山節考』出版記念会に谷崎潤一郎も出席。丸尾長頭の司会で、中央公論新人賞審査員伊藤整・武田泰淳・三島由紀夫の挨拶、正宗白鳥の祝辞、深沢七郎による自作「檀山節考」ギター独奏の後、友情出演でストリップ・ショウが演じられた(巖谷大四『懐かしき文士たち 戦後篇』)。

※深沢七郎は、昭和二十八年、桃原青二の名でギターリストとして日劇ミュージック・ホールに出演。丸尾長頭の勧めで『檀山節考』を書いた。

※中央公論新人賞受賞後間もなく、丸尾長頭と嶋中鵬二が付き添って、赤坂の福田家で、深沢七郎を谷崎に

紹介し、門下に加えるよう依頼した。その後、熱海の谷崎宅へ丸尾長頭が深沢七郎を連れて来たこともあったが、その時、深沢七郎が手土産として用意した田舎饅頭を食べた谷崎が、渋い顔をしたので、入門の件は言い出さなかった。それから間もなく、日劇の楽屋で丸尾長頭に会った際、潤一郎は、「深沢を弟子にすることはいいやだね、正宗君にでも頼み給え」と断った。これは、深沢七郎が正宗白鳥の所に出入りして、便所の拭き掃除をしていることが、その頃、話題になっていたせいもある(丸尾長頭「檀山節考ざんげ」「経済往来」S55/11、12、S56/1入門依頼の際の写真もある)。

5 『私の好きな六つの顔』(談)を写真付で「中央公論」臨時増刊号に掲載。春川ますみも登場する。

5・29 午後、笹沼千代子とストリップに行く(笹沼千代子日記)。

※日劇ミュージック・ホールだとすれば、「そよ風さんお耳を掻いて頂戴」で、5月23日から7月21日まで(橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

※1997/5/25 笹沼千代子私信によれば、メリー松原・ヘレン滝・ジプシー・ローズ・春川ますみが出たことは覚えているので、「そよ風さんお耳を掻いて頂戴」ではないかと言う。

※谷崎は笹沼宗一郎夫人千代子をよく日劇ミュージック・ホールへ連れて行った。男と一緒に行くのは嫌だった。谷崎は丸顔が好きだった。戦後の屋台や闇市がある時代に、千代子を浅草のストリップ劇場へ連れて行ったこともあった。舞台のすぐ傍へ行ってじっと見上げていたと言う(稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』3-126)。

※谷崎潤一郎が福田家から車で笹沼千代子らと一緒にいくと、必ず丸尾長頭が日劇小劇場の小さい入り口まで出迎えて案内してくれた。丸尾長頭は、日劇小劇場の案内状を、毎回、谷崎に送っていた。谷崎は春川ますみが特に最煩だった。千代子を待たせて置いて、ストリップに会いに行つて「触ってくるよ」と楽屋へ螺旋階段を登って行った。千代子は、「心臓麻痺を起こさないでよ」と言った。潤一郎は嬉しいとよだれを

垂らした。御飯の時もそうだった(H8/9/19 笹沼千代子直話、1997/5/25 笹沼千代子私信)。

7・26/9・15 「一つの船に二人の船長」を最後に、春川ますみは日劇ミュージック・ホールを退団

(橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

※以後、フリーでナイト・クラブなどのフロア・ショウに出演(『日本映画俳優全集・女優編』1980/12/31「キネマ旬報」増刊)。

※この時、谷崎は、「どんな所でもいいから、あなたが出演する時はお葉書下さい」と葉書を書き送った(『週刊文春』S40/8/23)。

12・15 午後、笹沼千代子と一緒に日劇ミュージック・ホールのストリップショウ「シスター・ボーイ」を見る。虎の門の福田家で食事。熱海へ帰る(笹沼千代子日記)。

※正しくは「メケメケよろめけ」(11・14/12・28)。

この頃から丘るり子がスターの仲間入りを果たす(橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

※11・14「内外タイムス」四面広告によれば、出演者

は、小浜奈々子・丘るり子のほか、両性の美貌ジーナ敏江・古川敏郎、バー青江、バー・ジミー、ボン・ヌールのシスターボーイら。

※谷崎潤一郎は丘るり子も好きだったと言う（「中央公論」S 40/10丸尾長顕「楽屋のおもかげ」）。

◆昭和三十三年◆（1958 戊戌）（数え年七十三歳）

1・6 『私の言葉』を「週刊新潮」に掲載

※この前、日劇ミュージック・ホールの「ゲイ・ボーイ」を見に行った、とあるのは「メケメケよろめけ」のこと。

2・27〜5・5 日劇ミュージック・ホールの「これはカックン！（ショックやわあ）」で、インテリ・ヌードの草分け・小川久美がデビュー。ただし、丸尾長顕「楽屋のおもかげ」（「中央公論」昭和40/10）によれば、乳房が小さいので谷崎は好まなかったと言う。

4・14 松子・千萬子・清治とナイトクラブ田園に春川ますみのナイトショウを見に行く。春川ますみが

挨拶に来るのを待つ間に松子と踊る。十年来踊ったことはなかったのだが、近頃熱海にナイトクラブが出来、そこで三度踊り、癖が付いた。春川ますみは、M・Hを止めてからどこへ行っていたのか様子が分からなかった。あれから後の動静を聞く。M・H時代より少し体が肥え過ぎたように思われる。京都にいるうちにもう一度会う約束をする（『四月の日記』）。

7・20 日劇ミュージック・ホールへ行った（7・21千萬子宛書簡）。

※演目は「夏の夜はいたづらもの」（7・3〜8・17）で、小浜奈々子・月城ゆり・丘るり子・瞳はるよ・朱雀さぎり・シャンパローなどが出演（橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』）。

7・21 千萬子宛書簡。「昨日、僕は日劇のミュージックホールへ行きました。すっかり顔ぶれが変わって美人ぞろひになり、出し物も大へん面白くなりました。今度君が来たら是非案内したいと思ってるます」とある（渡辺たをり『祖父 谷崎潤一郎』）。

9・6〜10・28 「恍惚！ 魅惑の瞬間」に島淳子初

出演。

※谷崎潤一郎は島淳子も好きだったと言う（『中央公論』S 40 / 10 丸尾長頭「楽屋のおもかげ」）。

10・28 朝、山口広一宛書簡602「新世界のヌードショウなどもちよいと覗いて見たい気がしています」とある。

※昭和三十一年頃から、関西のストリップ界から、局部をも隠さない特出しショウが始まり、関東地方でも、東京の都心以外は、特出しショウになって行った。しかし、日劇ミュージック・ホールは方針を変えなかった（石崎勝久『裸の女神たち』）。

11・20 虎の門福田家に、登代子・喜美子・千代子が訪ねて来る。一緒に日劇のストリップへ行く。お茶を飲んで、別れ、福田家に帰る（笹沼千代子日記）。

※演出は江戸川乱歩原案のヌード連続殺人「夜ごと日ごとの唇」（11・1〜12・27）で、小浜奈々子・六年ぶりの谷内リエなどが出演（橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』）。

11・28 止宿先の虎の門の福田家で笹沼源之助の金

婚式のお祝いの袱紗の箱に揮毫中、右手に麻痺が起る。三カ月の静養を医師から忠告される。↓以後右手に疼痛を覚え、執筆が不自由となる。

※丸尾長頭の「谷崎先生の心の片隅に」（没後版谷崎潤一郎全集月報第20号 S 43・6）よれば、右手が痛むようになってからは、寒い日には日劇ミュージック・ホールに行かなくなった。

12・31〜S 34・2・22 日劇ミュージック・ホール「愛撫の園」で、多喜万利デビュー。

※S 35・5・19の笹沼千代子日記によれば、谷崎は多喜万利がお気に入りだった。

※丸尾長頭編『日劇ミュージック・ホールのすべて』によれば、映画スター佐山亮の遺児。松竹歌劇団出身。六歳からバレエを始めたモダン娘。身長168cm。マリー・ローランサンの少女のような特異で妖麗な風貌。※改田博三『上方ヌード盛衰記』によると、多喜万利は目のつり上がったエキゾチックな容貌で、くねくねした感じのスローものが得意。日本人より外人向き。

◆昭和三十四年◆(1959 己亥)(数え年七十四歳)

1・29 千萬子宛書簡606。「日劇ミュージック・ホールで4月から僕の『白日夢』にヒントを得たものを上演するのは是非見て下さい」とある。

2・26〜5・5 日劇ミュージック・ホール七周年豪華公演「白日夢」(橋本与志夫・石崎勝久『THE NICHGEKI MUSIC HALL』東宝出版1982)。

2・26? 28? 千萬子宛書簡。「日劇ヌードショウは五月上旬まで長期興行の由」とある(渡辺たをり『祖父 谷崎潤一郎』)。

2・28 発行日劇ミュージック・ホール・「白日夢」パンフレットに、谷崎潤一郎の談話「観客になって楽しみたい」掲載*全集未収録。

3? 雑誌「日本」五月号に掲載する「谷崎潤一郎対談(第二回)」のために、熱海の自宅で春川ますみと対談する。「昨日、東大の沖中先生がもう絶対大丈夫だと言ってくれた」「春川ますみの猫みたいなのが好きだ」「お正月の春川ますみの映画「グラマー島の

誘惑」は見られなかった」「ストリップの和服はいつもお粗末すぎる。すぐ簡単に脱いでパツと裸になっちゃう、そんな感じなんだ。もっと良いものをキチンと着ていて、それで裸になる方がいい」「『白日夢』を見に行くのは4月になるだろう。まだ外に出たことがないんだから。庭には出るがね」「ヌードは夫婦で見るのは面白くない。一人に限る」「春川ますみの楽屋へは行ったことがなかった。あそこの楽屋は風通しが好くて涼しくて夏はいい」「病気が好くなったら君の舞台を見に行きましょう」などと語る。

3・8 千萬子宛書簡。「小浜ナナコ休演は私も甚だ残念に思っていました。あの子がローザになってくれたら、変なオーストラリア人などよりずっといいのですが残念です」とある(渡辺たをり『祖父 谷崎潤一郎』)。

※ローザは『白狐の湯』のローザで、オーストラリア人のピーチェス・ブラウンが演じた。

4・13 「内外タイムス」三面に、春川ますみの映画出演についての記事。川島雄三監督「グラマー島の誘

惑」の慰安婦役、青柳信雄監督「続社長太平記」に出演後、木村恵吾監督「一刀斎は背番号6」に出演中。東京映画と専属契約を結び、川島雄三監督「貸間あり」と佐伯幸三監督のアクション映画に出演が決まっている。

4・25 笹沼千代子と日劇へ行く。春川ますみが出演（笹沼千代子日記）。

※「白日夢」のこと。

※丸尾長顕「楽屋のおもかげ」（「中央公論」昭和40/10）では、「谷崎は見なかった」とするが、誤り。

※丸尾長顕は、新聞に出た春川ますみのステージ写真をわざわざ京都の谷崎邸に送って来た（渡辺たをり

『花は桜、魚は鯛』P235）。

5 雑誌「日本」に対談「谷崎潤一郎対談（連載第二回）」（谷崎潤一郎・春川ますみ）掲載

5・9 初日で日劇ミュージック・ホールで「ピンク・シャワー・フォーリーズ」上演。『瘋癲老人日記』のシャワー・シーンに影響したか？ 谷崎が見たかどうかは不明。

6 虎の門病院と東大病院で診察。右手の疼痛は、生命に関わるものではないが治療法がないと知り、谷崎はひどく落胆する（伊吹和子『われよりほかに』・松子「右手だけの手袋」）。

※如何にすれば楽に死ねるかということばかり考えていると潤一郎は松子に言った（松子「右手だけの手袋」）。

9? 日曜夜十時半から四十五分までフジテレビで「ピンク・ムード・ショウ」という番組が始まり、日劇ミュージック・ホールのヌードがお茶の間へ進出した（『裸の女神たち』『欲望の戦後史』橋本与志夫『ヌードさん』）

※改田博三『上方ヌード盛衰記』によると、10時50分から11時5分まで。出演は、日劇専属の多喜万利・島淳子らと、ゲストで奈良あけみ・春川ますみ・丘るり子など。

10 『夢の浮橋』を「中央公論」に掲載。

※『夢の浮橋』の評判が悪かったのは、口述筆記だったためだと考えた谷崎は、理想の秘書を探し始めた。

丁度その頃、観世栄夫・恵美子の縁談について頻繁に出入りするようになった武智鉄二の弟子のMが気に入る、Mが来ると必ずハイヤーを呼んで、ドライブに出かけた。谷崎はMを秘書にしたいと考えていたようだが、Mは女優を目指していたので、都合が悪かった（伊吹和子『われよりほかに』）。

※Mは、御木きよら。本名森某、魚河岸問屋の娘。『瘋癲老人日記』の颯子の足の部分は御木きよらがモデル。谷崎は暇さえあれば、御木きよらの足を愛撫し、接吻し、「君の足は日本一だ、こうやって触っている時が一番幸せなのだよ」とに繰り返し言ったという。

武智鉄二によれば、沢村訥升の下半身は、御木きよらに似ていた（武智鉄二『歌舞伎俳優論 沢村訥升』「演劇界」S 51/3）。

※渡辺清治氏によれば、御木きよらは谷崎の秘書。武智鉄二の所で恵美子の友達だった（1998/8/23 渡辺清治氏直話）。

◆昭和三十五年◆（1960 庚子）（数え年七十五

歳）

5・19 電話で千代子・喜美子を誘って、日劇のストリップ・ショウに行く。多喜万利がお気に入り（笹沼千代子日記）。

※「内外タイムス」によれば、5月12日初日、岡田恵吉構成・演出「街の噂・東京の下半身（内緒で覗きましよう）」。多喜万利のほか、美保みどり、浜みなと、リタ・エレン、パリのミュージックホールにも出演していたシャンソン歌手デデ・ドウ・モンマルトルなどが出演。

9・27 午後8時から9時までNHKラジオ第二放送で「教養特集 文壇よもやま話 谷崎潤一郎さんを囲んで」（谷崎潤一郎・池島信平・嶋中鵬二）放送。のち「文壇よもやま話（下巻）」（昭和36年12月 青蛙房刊）に収録。「ミュージック・ホールへは時々行く、楽屋へ案内される」などと語る。

10・17午後、猛烈な心筋梗塞の発作に襲われる。上田英雄の指示で、以後10月一杯は自宅で臥床（『当世鹿もどき』「病床にて」）。↓以後、心臓病に苦しむ。

・31 寝台自動車で東大上田(英雄)内科に入院
 『当世鹿もどき』「病床にて」。

12・12 退院。以後、銀座東急ホテルに宿泊し、予
 後の様子を見る(『当世鹿もどき』「病床にて」)。

・24 銀座東急ホテルを出て、50余日ぶりに熱海
 に帰る(『当世鹿もどき』「病床にて」)。

◆昭和三十六年◆(1961 辛丑)(数え年七十六
 歳)

5・18(木)熱海の松子夫人から丸尾長顕に電話、
 日劇ミュージック・ホールの座席2枚依頼(『中央公
 論』S 40/10丸尾長顕「楽屋のおもかげ」)。

・19(金)春川ますみが日劇ミュージック・
 ホールに出演。谷崎はハンティングにグレェの夏のイ
 ンバネス、和服、ステッキ、痛む右手に手袋をはめて、
 開演二〇分前に、スラックスをはいた女性を連れて駆け
 付けた。座席はいつもの前から2列目。ショウの後、
 丸尾長顕が春川ますみの楽屋に案内した。何枚も写真
 を撮る。

谷崎は、小浜奈々子・丘るり子・島淳子なども最前
 だったようだが、インテリ・ヌードの小川久美の肉体
 には反発を感じていたらしい。小さい乳房には興味が
 ないと言っていた。スレンダーな近代的肉体より、や
 や太り肉タイプが好み。アクロバットは気持が悪いと
 言っていた。

この次は、脚本を書いて、演出すると言っていたが、
 果たさなかった(『中央公論』S 40/10丸尾長顕「楽
 屋のおもかげ」)。

※演目は「申訳ない! ヤボな殿方カンケイない」で、
 春川ますみ・小浜奈々子・多喜万利などが出演(橋
 本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

※丸尾長顕『回想小林一三』グラビアに、日劇ミュー
 ジック・ホールの春川ますみの楽屋を訪れた御木きよ
 ら・谷崎潤一郎・丸尾長顕の写真がある。谷崎はス
 テッキを持ち、手袋をはめている。「楽屋のおもかげ」
 に言う「スラックスをはいた女性」は御木きよらであ
 る。

※丸尾長顕「楽屋のおもかげ」には、この日が日劇

ミュージック・ホールを見た最後だったと思う、とあるが、誤り。

10 対談「伊豆山閑話」(谷崎潤一郎・円地文子) (風景)。

※「ヌードはたまに東京へ行くと、一寸見に行く」
「最良は春川(ますみ)」「多喜万利も知っている」などとする。

11 「中央公論」に『瘋癲老人日記』連載(『S 37・5』)。

※颯子が日劇ダンシング・チームを辞めた後、浅草辺にいたこともあるらしい、とあるのは、ストリップパーをしていたことを仄めかしたものだ。また、シャワー・ルームで老人がネッキングをする際、颯子はミュージックホールの踊子がはくようなサンダル・ヒールを故意にはいて来る。

◆昭和三十七年◆(1962 壬寅)(数え年七十七歳)

2 春川ますみが東京新聞記者・映画評論家・松谷

浩之と結婚(橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

※谷崎邸に挨拶に行った帰り際、松谷が「これからも二人で伺わせて頂きます」と言うのと、谷崎はニコリとせず、「いや、春川君一人の方がいいよ」と答えた(1965/8/23「週刊文春」)。

3・15・6 日劇ミュージック・ホールの開場10周年記念公演「そとと乳房は夢を見る」に春川ますみが出演(橋本・石崎『THE NICHIGEKI MUSIC HALL』)。

※谷崎が見たかどうかは不明。

5・10・7・1 日劇ミュージック・ホールで「黒いハットにピンクの貴婦人」。小浜奈々子が出演。

※この時か? 日劇ミュージック・ホールの楽屋で小浜奈々子と一緒に谷崎の写真あり。同じ時か? 高輪プリンス・ホテルのプールで、シンクロナイズド・スウィミングを見る谷崎の写真あり。撮影は共に山田健二(『新潮日本文学アルバム』に掲載)。↓これ以後、谷崎がヌード・ショウを見たという確実な記録は、今

のところが発見できない。

◆昭和三十八年◆(1963 癸卯)(数え年七十八歳)

★夏、軽微な心臓発作で検査を兼ねて心臓研究所の付属病院に入院、一ヵ月以内で退院(松子「終焉のあとさき」『倚松庵の夢』)。

8・30〜10・27 日劇ミュージック・ホール「七いろの欲望」で、歌舞伎舞踊「黒塚」のヌード化が好評。谷崎が見たかどうかは不明。

12・29〜S 39・2・24 日劇ミュージック・ホール「女だけの夜の正体」で、観世栄夫監修により、ヌード能「小町」上演。観世栄夫は谷崎の義理の娘婿に当たるが、谷崎が見たかどうかは不明。

11半ば 内幸町イイノホールで開かれた芸術祭大衆芸能部門参加の催し「寄席'64」にヌード能「小町」が上演された。谷崎が見たかどうかは不明。

◆昭和三十九年◆(1964 甲辰)(数え年七十九

歳)

2? 心臓発作が頻々と起こり、再び心臓研究所に入院。2時間にわたる大発作もあった(松子「終焉のあとさき」『倚松庵の夢』、伊吹和子『われよりほかに』)。

3頃 食欲不振が著しく、癌に違いないと言って、2度も胃の透視をして貰ったが、癌ではなかった。一点を凝視する時が目立って多くなり、無口になった。後にこの食欲不振が前立腺肥大症と知った(松子「終焉のあとさき」『倚松庵の夢』)。

6 『路さんのこと』(マドモアゼル) *武智鉄二監督映画『白日夢』に主演する路加奈子について。「日本風の細面の美人より、ブリジッド・バルドーやマリリン・モンローのような、グラマーな女性の方が好き」とある。

・21武智鉄二監督映画『白日夢』封切り。路加奈子主演。奈良あけみも出演。

※武智鉄二「なぜ私は『白日夢』をつくったか」(『三島由紀夫・死とその歌舞伎観』)によれば、谷崎は試

写を見て、少し長いと言った。

※稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』5-141によれば、谷崎も見に行き、まあまあの出来と評価していたらしい。

同『聞書谷崎潤一郎』によれば、「今度はカラーでやりたい」と言っていたと言う。

8・12『過酸化マンガンの夢』と『柳湯の事件』による武智鉄二監督映画『紅閨夢』封切り。小浜奈々子も出演。

10・5『週刊文春』にグラビア「湘碧山房新居でくつろぐ谷崎潤一郎氏」掲載。『紅閨夢』のようなばかりかしいものは見ません。』と発言。

◆昭和四十年◆(1965 乙巳)(数え年八十歳)

1・8-3・9 お茶の水の東京医科歯科大学付属病院に入院。気心の知れない医師や看護婦にカテーテルの出し入れをされるのが不愉快で、死にたい、死にたいと言い暮らしていた。前立腺肥大症の手術を受ける(『七十九歳の春』)。

7・30 急性心臓衰弱のため死去。

◆昭和五十九年◆(1984 甲子)

3・24 日劇ミュージック・ホール閉鎖。

三、戦後の谷崎潤一郎

谷崎潤一郎は、敗戦当時、既に満五十九歳であり、『過酸化マンガンの夢』で作風の転換を示した時には、満六十九歳に達していた。ここからも想像されるように、戦後の谷崎が新たに直面しなければならなかった最大の問題は、自らの老いであった。

具体的には、谷崎は戦後間もなく老人性インポテンツに陥り、年表にその一端を示して置いたように、高血圧や心臓病にしばしば苦しめられ、自らの死についても、焦眉の問題として考えない訳にはいなくなっていた。『過酸化マンガンの夢』以降の作風の転換も、これらの問題と無関係ではあり得ない。

私見によれば、谷崎が生涯にわたって一貫して女性の肉体に非常な執着を示したのは、幼児期に彼を死の不安から守ってくれたのが、若き日の母の肉体だった

からである。⁽¹⁾『雪後庵夜話』で死の恐怖について語った後、《梅原龍三郎君の裸婦によく見るムツチリと肥えた赤みを帯びた肉体、私は殊にあれに魅せられる。あゝ云ふものを見ると、俄に世間が明るくなつたやうに感じ、やはりなか／＼死んではならないと思ひ、何かムムクと腹の底から湧き上つて来る。》と述べているのが、一つの傍証となろう。

だとすれば、自らの老いを感じ、死の恐怖が強まるにつれて、若く健康な生命力に溢れた女性の肉体への執着が強まるのも当然である。しかし谷崎は、インポテンツの結果、もはや女性と直接に肉体的な交渉を持つことは出来なくなっていた。このことが谷崎にとって極めて大きな問題だったことは、インポテンツが『少将滋幹の母』の国経、『鍵』の教授（ただし、精力減退に対する抵抗という形で）、『残虐記』の今里増吉（原因は原爆の被爆）、『夢の浮橋』の紉の父（腎臓結核でセックスが禁止される）、『瘋癲老人日記』と、殆どの戦後作品で重要な設定となつてることからも窺える。

谷崎が老年に至って、しかも体調が悪い時に頻りにストリップ通いをするのも、また、女体の表現を抑制していた日本回帰の作風から転換したのも、死の恐怖から逃れるために、若い女性の肉体を強く求めたことの現れと考えられるのである。

以下、ことの経過をやや具体的に見て行くと、先ず戦後間もなくインポテンツに陥った谷崎は、松子に捨てられるという不安を刺激され、それを『少将滋幹の母』の国経によって表現した。しかしこの時点では、同時に壮年の時平・平中、少年の滋幹にも自己を仮託しており、まだ老年の危機感は強くなかった。また、ヒロインには概ね松子をイメージし、その美学は日本回帰の延長線上にあった。

この頃、既に谷崎は、奥村富久子・市田やえ子・五味和子などに、新しいヒロインの可能性を模索していたが、当時は、アメリカナイズされた戦後の日本に背を向けようとしていたこともあって、松子から別の女性に乗り替える所までは、結局、行けなかったのである。

その後、高血圧と『源氏物語』改訳の仕事のため、創作活動は休止するが、その間に松子の老齢化も進み（昭和三十年に満五十二歳）、潤一郎の生命力が衰えるにつれて、若い生命力に溢れたヒロインの必要性は切実さを増したと推定される。そこに現れたのが、渡辺千萬子であり、春川ますみに代表される日劇ミュージック・ホールのダンサーたちであり、京マチ子・淡路恵子・「悪魔のやうな女」のシモン・シニョレ・炎加世子らの映画女優たちであり、また女中ヨシや御木きよらなどであった。

昭和三十年十一月の『過酸化マンガン水の夢』は、新しいヒロインとして、日劇ミュージック・ホールの春川ますみ（昭和十年生まれ）、シモン・シニョレを登場させ、脇役的是があるが、嫁の千萬子（昭和五年生まれ。作中では美津子）も登場させ、松子離れをはっきりと示している。

作中、春川ますみに魅せられたことを記した後に、《このこと家人には語らず心中ひとり左様に思ひしのみ》とわざわざ注記してあるのも、松子との心理的な

隔絶を明示するためであろう。⁽²⁾

また、この作品では、一人で勇敢に日劇を見に行く美津子（これも美津子のイメージを作るためのフィクション）や、恐ろしい女であるシモン・シニョレや呂太后に対して、松子は日劇も一人では見られず、映画「悪魔のやうな女」も見るに耐えない心臓の弱い女とされ、眨められている。映画「悪魔のやうな女」は、妻の心臓病を利用して恐怖でショック死させるというストーリーであるが、恐らく潤一郎は、心臓の弱い松子を殺害するという空想すら抱いたことがあるのであろう。⁽³⁾

こうした松子離れと同時に、この作品では、女に殺されるといつかつてのマゾヒスティックな空想が、復活し始めている。まだ明瞭ではないが、ニコルのミッシェル殺しや人屍がそれを暗示する。そして、私見によれば、女に殺されることは、谷崎にとって、その女の命の中に自分が吸収されて生き続けることを意味するものであり、死を乗り越える有力な手段の一つだった。しかし、こうした幻想を可能にするためには、ヒ

ロインが若く強いことが重要であり、その為もあって、『過酸化マンガンの夢』以後のヒロインたちは、もはや松子をイメージしたものではなくなっているのである。例えば『鍵』のヒロインは、誰をモデルにしたとも言えないが、妻を強い悪女に変えたい（或いは取り換えたい）という潤一郎の願望に発していることは明らかである。

『春琴抄』の時代には、松子に強い女を幻想することも可能だったが、この頃にはもはやそれは不可能になつていた。⁽⁴⁾そして、『瘋癲老人日記』からは、あからさまに千萬子が新たなヒロインの座に着き、松子は『婆サン』として貶められるようになる。谷崎が昭和三十八年十月に、伊吹和子氏に語ったと言う「天児関伽子」の出て来る小説でも、主人公の老人（『潤一郎』は、後妻（『松子』と別れ、若い女・魑魅子（『千萬子』と同棲し、セックスのし過ぎで狭心症で死ぬことが予定されていた（伊吹和子『われよりほかに』）。

『鍵』『残虐記』『瘋癲老人日記』、および「天児関伽子」の出て来る小説は、谷崎が自らの死を、ヒロイン

の内に吸収されるという方法で乗り越えようとした試みの系列と考えられる。『鍵』は、セックスを通じて妻に生命力を吸い尽くされるという幻想であり、『残虐記』は、母に見守られながら眠りに落ちる幼児のように、妻に見守られながら死ぬことで、妻の内に吸収されようとする幻想であり、『瘋癲老人日記』は、遺骨を颯子の足に踏まれることで、颯子の内に生き続けんとする幻想である。

一方、自分自身を男性の分身へ譲渡することによって死を乗り越えようとする試みもあって、これは『少将滋幹の母』『鍵』『残虐記』『夢の浮橋』に見られる。『少将滋幹の母』では、国経から時平へ北の方が譲渡される。ただし、国経も時平も不幸に終わる。『鍵』では、教授が死へ追いやられ、木村に取って代わられる。ただし、木村と郁子の関係も安泰とは思われない。『残虐記』では、今里増吉が、自分の分身のような野本鶴二にむら子を譲渡する。が、この作品は中絶する。『夢の浮橋』は、最初の茅淳から第二の茅淳へという第一の危ない橋（『夢の浮橋』と、子から夫へ、母か

ら妻へという第二の危ない橋を渡る話である。しかし、冒頭、池の土橋の下にあった深い穴が暗示していたように、破滅の淵が、結局、彼らを飲み込んでしまう。

この様に、この系列の解決法は、すべて不成功に終わっている。これは、谷崎が自己の分身・後継者としての程の男性を、現実に見出すことが出来なかったからであろう。

いずれにしても、『過酸化マンガン水の夢』以降の谷崎文学は、この様な死とインポテンツに対する対応を中心に展開していると言えるし、ストリップ通いもそれが実生活において現れた姿であるという意味で重要なのである。

ただし、これらの戦後作品に、ストリップが直接顔を出す例は少なく、先に述べた『過酸化マンガン水の夢』の他には、『鍵』『瘋癲老人日記』に若干の痕跡が認められる程度である。

『鍵』では、郁子が木村を相手にアクロバットのよきな真似をした、とあるのは、一部のストリップパーが行ったアクロバティック・ダンスを念頭に置いたもの

であろう。

『瘋癲老人日記』では、颯子が日劇ダンシング・チームを辞めた後、浅草辺にいたこともあるらしい、とあるのは、颯子が元ストリップパーをしていたことを仄めかしたものであろう。また、シャワー・ルームで老人がネッキングをする際、颯子がミュージック・ホールの踊子がかくようなサンダル・ヒールを故意にはいて来るのも、ストリップの影響である。

また、『鍵』『瘋癲老人日記』で、郁子・颯子の裸体を見ようとすることや、『鍵』で郁子の写真を木村に見せる所や性行為の描写、『鍵』『瘋癲老人日記』で、危ない方向へ一歩一歩進んで行くサスペンスなどには、ストリップに近い性質が認められる。

この様に、ストリップは、谷崎文学を直接変えたとはまでは言えないが、戦後の谷崎文学の変貌を解釈する上では、やはり無視できない問題なのである。

〔注〕

(1) 拙稿「谷崎潤一郎・変貌の論理」(H9/5「国語と国文学」)・「昭和戦前期の谷崎潤一郎」(H10/5「国文学」)を参照されたい。

(2) この一年前、「週刊朝日」昭和二十九年十一月十四日号の『妻を語る』で、谷崎が全く妻を語ろうとしなかったのも、松子を賛美する気持を失っていたからであろう。

なお、『過酸化マンガン水の夢』では、この時が春川ますみを見た最初のように書いているが、これは作中の都合でそうしただけで、本当はもっと前から見ていた可能性もあるように思う。

(3) 心臓の弱いヒロインが殺害されるというモチーフは、『夢の浮橋』にも用いられているが、経子の殺害は、松子との離別願望によるものと言うより、インセストに對する罰と考えるべきであろう。

(4) やや脱線になるが、谷崎に文学的インスピレーションを与える女性には、既に『夏菊』の頃から、松子よりむしろ重子になっていた、というのが私の推測である。『細雪』が雪子(＝重子)を中心とするものであることは言うまでもないこととして、『聞書抄』や、戦後の『少将滋幹の母』『鍵』『夢の浮橋』についても、ヒロインのイメージはかなりの程度、重子に拠っていると私

は思う。『雪後庵夜話』にも説かれる如く、松子にはしぶとい根性が全くなく、重子にはそれがあった(演技力や幼児性、悪戯を面白がるような所は、松子の方にあったが……)。そして、『正宗白鳥氏の批評を読んで』に言う如く、見かけは貞女のように、背徳な感情も抱きかねない内向的悪女に惹かれていた谷崎にとって、心の内を容易に見せない重子は、ひどく文学的想像力を刺激する存在だったのである。

(5) ついでながら、『夢の浮橋』で、紬が経子の形見の武と二人で暮らす結末になっているのは、当時谷崎が、千萬子の娘たをり(武とはば同年)を溺愛し、千萬子やたをりの顔を見ていると作品が書ける(渡辺たをり『祖父 谷崎潤一郎』P42～3)と言う程になっていたであろう。